
格子のむこうに

pinkmint

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

格子のむこうに

【Nコード】

N3431M

【作者名】

pinkmint

【あらすじ】

ある小さなうさぎの、名もない一生です。実話をもとにしました。短編小説というより、詩みたいなものかも。

その子は、気がつけば狭い小屋の中にいた。

金網越しにのぞいてくるのはランドセルを背負った子供たち。

一日に一回戸があいて、たくさんの子供たちがはいつてくる。

差し伸べられる手、て、手。

次から次へと抱きまわされて、小さな手足をひっこめてじっとして
いた。

「かわいい」「かわいいねえ」

かわいいってどういう意味だろう？

親の顔も兄弟の顔も知らないチビうさぎの鼻先に

林檎とかかさかさの食パンがおしつけられる。

食べてみるけどおいしくない。何かが違う。

「ウサギはキャベツを食べるものよ」

時々そんな声がして、誰かがキャベツやニンジンを食べさせてくれ
た。

これはほんとに美味しいと感じる。

10分ほどで小屋に戻される。エサ入れには何もない。

どういうわけか子供に抱きまわされている時間だけがご飯の時間で、
あとはなにもおいてくれなかった。

日が昇り日が沈み、ただご飯の時間を待つ日々。

ニンジンとキャベツ。それは4日にいっぺんくらい。

あとは食パン。

ただ金網の外を眺める日々。

そのうち子供たちは飽きて、餌の係を忘れるようになった。

誰かが金網の外を通ると懸命にあとを追った。

ぼくのごはんは？

だれもかわいいといわなくなった。だからごはんをわすれるようになったの？

その頃学校に何かの仕事できたらしいあたらし大人が僕に気づいて金網の隙間からときどき草やキャベツを突っ込んでくれた。

むちゅうでたべた。

「ごめんね、毎日の仕事じゃないのよ。でもきたらあげるから」

ほかに、大人が何人が気付いて金網の隙間から草をくれるようになった。

「夏休みになっても、あなたはちゃんとお世話してもらえるのかしらねえ」

「ねえきみたち、ウサギのこと忘れないで。ご飯はニンジンとキャベツだよ」

そんな声が聞こえた。

誰ももう僕を抱かない。かわいいともいわない。

暑い日が続いて、のどが渴く。

金網の向こうの子どもたちの姿が消えた。

時々来ては、パンとか果物の皮をくれる。

キャベツとにんじんは？

そして、ぼつぼつきていたこどもたちの足が途絶える。

誰も通らない。

あつい、のどが渴く、お腹がすいた。

あの大人は？

金網の前をたまに大人が通る、でも草をくれた人じゃない。
夢中で追っかけて金網をかじった。
小屋の中のほうきのさきもたべた。

だれもこない。

ものごころついた時は目の前の景色は金網だった。
今もほこり臭い金網が見える。
お皿の中のわずかな水も尽きた。

きたなくなつたから？
かわいくないから？

おおきくなつたから？

横になると、もう体が動かなくなつた。
いつも見る夢も、金網の向こうの景色。
あの隙間から、いつか草がはいらないかなあ。
いつか草が。

夏休みの終わり。

キャベツをもった「いつもの大人」が小屋の前に立ち尽くした。

「ぴよんちゃんは夏の間に天国に行きました。みんなで祈ってあげましょう。みじかいあいだったけどありがとう」

小さな貼り紙。

そのおとなは、学校の警備員さんの所に話を聞きに行った。

「餓死ですよ。お盆の間、こどもの当番はなしになって、先生の間で交代にえさをやることになってたはずなのに、当番がはつきりしないまま夏休みになってそのまんま。」

今は責任の押し付け合いやってますよ」

ながいこと大人は小屋の前に座り込んでいた。ちょっと泣いていたかもしれない。

校庭の片隅に小さなお墓があった。

「小屋があるから、うさぎが来る。」

もうあの小屋は壊してほしい、壊すべきだと思います。

命の尊さを教えるためなんて、大人のほうがそんなもの放棄してるのに

何のためにうさぎを飼うんでしょうか」

おとながいう。警備員さんはだまっていた。

おとなは、草をお墓のそばにうえた。

ぴよんちゃんが好きだったオオバコの葉。

小屋はきれいに掃除されて、そして。
新しいうさぎが入った。

子どもたちが小屋にむらがる。
「かわいい」「かわいいねえ」
次々に抱きまわされる子うさぎ。

ごはんはやはり、食パンとりんご。

また夏が来る。

（後書き）

このお話のもとになった悲劇は今でも忘れられません。

夏休みももうすぐ。

動物の世話当番とかに当たっている人、あるいは先生。

どうか責任を持って、きちんとお世話してあげてください。

閉じ込められた子たちは、人間の手だけがほんとうに生きるようです。

お願いします。

> i 8 7 3 5 — 1 0 9 4 <

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3431m/>

格子のむこうに

2011年10月7日03時12分発行